

生活文化を読む視点

中込睦子

人文・文化学群／日本語・日本文化学類
人文社会科学部研究科歴史・人類学専攻准教授
(なかごみ むつこ／日本民俗学)

はじめに

私の担当する日本語・日本文化学類は、他の人文系学類とは異なり、主専攻・コースに分かれていない。学類全体で一つの日本語・日本文化学主専攻という点が特徴であり、言語・文化両分野を学ぶことを通じて日本の社会と文化について理解を深めることを目指している。このような専攻の立て方は、本学類設立当初の一つの柱が日本語教育だったことに由来する。外国人に日本語を教える場合、日本語の背景にある（あるいは日本語をはぐくんだ）日本文化の理解なくしては十分な日本語教育は行えないと考えられたからである。

現実には、本学類の卒業生の皆が皆、日本語教育の道に進んでいるというわけではない。しかし、現代の日本では、外国人と接触する機会は以前に比べて格段に増加しつつあり、そのような場面で日本人としての在り方や日本文化への素養が問われる機会も増えている。日本文化に自覚的に向き合うという本学類の特質は、日本語教育に限

らず、様々な場面で大きな意味をもって来るであろうと考えられる。

とはいえ、言語学の基礎の上に立つ日本語学に比べ、日本文化学というのは学生にとってややわかりにくいかもしれない。現行カリキュラムの科目でいえば、日本史・日本文学・歴史地理学・教育学・文化人類学、そして私の専攻する日本民俗学などの分野から受講科目を選択し、学生がそれぞれ各自の日本文化学を組み立てていくことになるわけだが、それでは民俗学は彼らに日本文化・社会の何を伝えることができるのか？ 着任以来私なりに色々と考え試みではきたが、残念ながらいまだにこれが正解というものには到達していない。

ここでは、ここ何年かの授業を通じて私なりに学生に学んで欲しいと思っている事柄について述べることで、この稿の責を果たしたいと思う。

私の担当科目その一「日本の社会と民俗」

私の担当するいくつかの科目の内、民俗

学の成果を直接反映する科目といえば「日本の社会と民俗」「日本の社会と民俗演習」の二つということになろう。いずれも、講師である私自身と大半の受講生を含むごく普通の日本人の、普段は余り意識されることもないような日常生活を、改めて意識の対象とすることを目指している。

民俗学が対象とする民俗事象は、典型的・集团的（非個人的）・伝承的な文化現象であるとされている。つまり、どこかの誰の発案ともわからないものではあるが、その集団内ではおよそ誰もが日々繰り返し、時をこえて不断に再現し続けられるような類の文化現象、普通に言う風俗習慣の類である。もちろん再現といっても、そっくりそのまま繰り返されるわけではない。その時々、の担い手の考え方や周囲の事情に応じて改変されていくのは当然であり、伝承とはそのような改変も含めた営為ということになるのか。

日常生活全般が対象であるからその範囲は広いが、講義では、「家族を通してみる日本社会」をテーマとして、家族の理念と実態、また家族と家族をその内に含む社会全体の仕組みとの関係などについて、いくつかのトピックスをとりあげて検討していく。とりわけ、これまで日本社会の基底をなしてきた「家」制度、「家」意識の成立と変容は、社会制度の問題であるのみならず、

日本人の人生観、人間観にかかわる重要なテーマであると考えている。

私の担当科目その二「日本の社会と民俗演習」

講義というものは、受講生の発言や質問をできるだけうながしたとしても、どうしても講師からの一方通行になりがちである。これに対して、演習は受講生自身が主役である。民俗学という学問は、その性質上、講師や受講生自身もまた分析の対象となる分野であるが、講義ではなかなかそのことが伝わりにくい。演習はその点、発表のテーマや内容などに自ずと受講生自身の生活背景が現れてくるものであり、ディスカッションを通じて私達自身が分析対象であることを実感できる。私にとっては楽しい授業である。

演習では、「描かれた民俗社会」をテーマとして、史資料類や民俗誌を講読している。ここ何年かは、江戸時代後期の国学者、屋代弘賢が諸国の風俗習慣を調査するために書き送った質問状「風俗問状」とそれへの各国からの「答」を読んでいる。「風俗問状」は、年中行事や冠婚葬祭に関する質問項目131項目からなっている。民俗学者柳田国男が早くに雑誌上で紹介したことで知られ、いわば江戸時代に行われた自記式アンケート、統一項目による全国的民俗調査の

先駆とも言われている。答書は現在まで23編が知られており、書き手によってそれぞれ個性あふれる内容である。

近世の文献史料をあつかうのであるから、初歩的な古典読解力は当然必要であるし、また当時の儒学者・国学者の素養にも留意する必要がある。また、取りあげられる民俗事象についての基礎的な知識も必要であるし、またその地域固有の地理的・歴史的事情について考慮する必要もある。

受講生、特に各回の報告担当者は、こうした事柄に留意して史料に記された近世の民俗を的確に把握するとともに、対象地域の市町村史や調査報告書等の民俗誌から現行民俗の状況を把握し、またその民俗事象に関する研究成果からその民俗の意味を考えることを求められる。史料の逐語訳や語釈ももちろん必要であるが、それ以上に史料から自分なりの問題点を見だし、その問題について想像力を駆使して情報収集する能力、その結果知り得た事実を他人にわかるように的確に表現する能力を身につけることが、この演習では求められているといえよう。

今後の課題

講義と演習を通じて私が受講者に気づいて欲しいと思うことは、私達自身が文化の枠組に制約され、その中で生きていること

を自覚するということである。もちろん、文化的枠組は変えることのできるものであるし、現実には気づかないうちに少しずつ、しかし確実に変化してきている。私などは、改めて過去の体験を思い返してみると、何と変わってしまったことかと唖然とすることが多い。まだ若い受講生達にはそのような感慨は無縁であろうが、そのような枠組の中に生きていることは彼らもまた同じである。

民俗学というと、何か古くから伝わっている古色蒼然たる行事や物珍しい習慣（奇習！）を研究する学問のように思われがちである。しかし、そのような理解は正しくない。確かにその事柄の特質を浮き彫りにするために、極端な事例や余り一般的とはいえない珍しい現象を取りあげることはあるが、それは一種の戦略である。それらを通じて、私達のありふれた日常そのものが、歴史性や地域性を帯びた文化の一断面であることをわかりやすく示そうとしているに過ぎない。

そのことを理解してもらうには、例えば演習でとりあげる史料も、近世の文献よりもより現代的な素材の方が適切かもしれない。近世の史料を取りあげるのは、生活文化のもつ歴史性を実感してもらいたいからであり、また日本文化の理解には古典の素養もある程度は必要と考えるからである。

しかし、受講生は、どうしても書かれた内容について「昔の人は・・・」ととらえがちであり、現代の私達の生活に連なるものであるという認識は薄くなりがちである。

歴史性と現代性とを兼ね備えた素材、そして私達の日々の暮らしにより近い素材とは何か。あいかわらず模索の日々であるが、例えば著名な民俗誌の場合、後年に追跡調

査が行われる場合が少なくない。そうした時代と立場を異にする人々の手で書かれたいくつかの民俗誌の比較検討などはどうであろうか。演習にとりあげた文献の対象地域を、受講生自身が是非訪問してみたいと考えるようになれば、この演習は成功といつてよいであろう。そう思いつつ、いくつかのアイデアを温める昨今である。



かつての大家族の住まい（岐阜県大野郡白川村御母衣、旧遠山家 1994年撮影）